

2016年冬鳥ウォッチ報告

今年もカッコウのどかな鳴き声が聞こえる季節になりました。冬の間、私たちを楽しませてくれたアトリやマヒワも故郷で繁殖しているところと思われます。2015/2016年冬(以下2015年冬、昨冬)は、アトリの大群が東北地方や関東北部に出現し、大いに私たちを楽しませてくれました。さて、1年が経過して、2016/2017年冬(以下2016年冬、今冬)のアトリはどの地域にどのくらい飛来したのでしょうか。また、2016年10月には身近な冬鳥のひとつであるカシラダカが、国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストに絶滅危惧種(VU)として新たに選定されました(<http://www.iucnredlist.org/details/22720960/0>)。はたして、カシラダカの今冬の生息状況はどうだったのでしょうか。以下に、2016年冬の冬鳥6種の記録状況を報告いたします。

調査および記録状況

2016年冬の調査は、関東以西の本州、四国、九州の1都1府20県の43名の方によって96か所の調査地から情報が寄せられました。調査対象種6種の記録件数の合計は164件で、調査地数、記録件数とも昨年よりやや減少してしまいました(図1)。大まかな地方別の調査地数は、今年も関東・甲信地方が最も多く52件、次いで中国・四国・九州が21件、中部・近畿地方が20件でどちらも昨年より増加しました。しかし、昨年記録が多かった東北地方は記録がありませんでした。さらに、昨年同様に新潟・北陸は2か所と少なく、北海道からの情報はありませんでした。これらの地域では、積雪も多く、気温も低いため、定期的な冬の調査は難しいのかもしれませんが。

記録種は、調査対象種の6種すべてが記録されました。しかし、相変わらずイスカ(1件)とハギマシコ(2件)の記録件数は、ほかの4種と比べると極めて少数でした。一方、過去に情報件数が最も多かったのはカララヒワですが、2016年冬はアトリが最も多く53件で、この値は過去に最も多かった昨冬の45件を抜いて最多件数を更新

しました。カララヒワは46件、カシラダカ42件の順でした。カシラダカの情報件数も過去最多件数をかぞえました。国際自然保護連合(IUCN)がカシラダカを絶滅危惧種(VU種)に選定したことで、本種の生息状況に関心が高まったためかもしれません。マヒワは、昨冬に引き続き情報件数が少なく20件でした。

各種の記録状況

2016年のアトリは小さな群れが広く分布？

2015年冬は、東北地方から北関東ではカウントできないほどのアトリの大群が記録されました。その一方で、関東南部など他の地域では大きな群れはほとんど記録されませんでした。2016年冬は、昨年冬のような大きな群れは記録されず、201羽以上の大きな群れの報告はわずかに2件に過ぎず最多個体数も500羽でした。しかし、前述のように情報件数は過去最多を記録しました。その半数近くは21~50羽以下の小さな群れでしたが、今冬は昨年と違って南関東や西日本でも記録され、広く各地に分散したと言えるかもしれません(図2)。今冬の情報件数の多さは、おそらく市街地の公園や周囲の雑木林など身近な場所にも群れが飛来したことで増えたものと思われます。似たような状況は、東京の公園などにも飛来した2008年冬を思わせます。ただし、2008年冬では今冬とは異なり、九州では1万羽を超える大きな群れが記録されていました。なお、昨年、最初に大きな群れが記録された宮城県北部では、今冬は小さな群れが記録されただけで大きな群れは記録されていないようです(嶋田・高橋私信)。

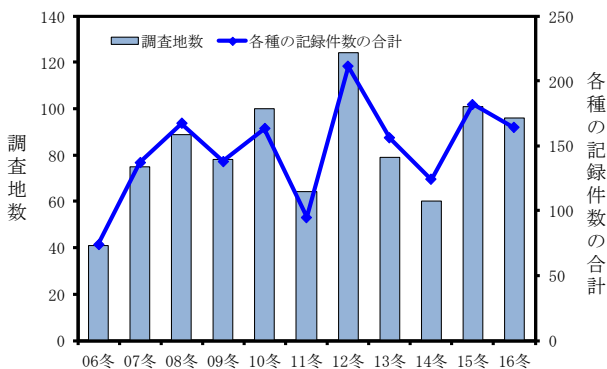


図1. 冬鳥ウォッチの調査地数および情報件数の推移

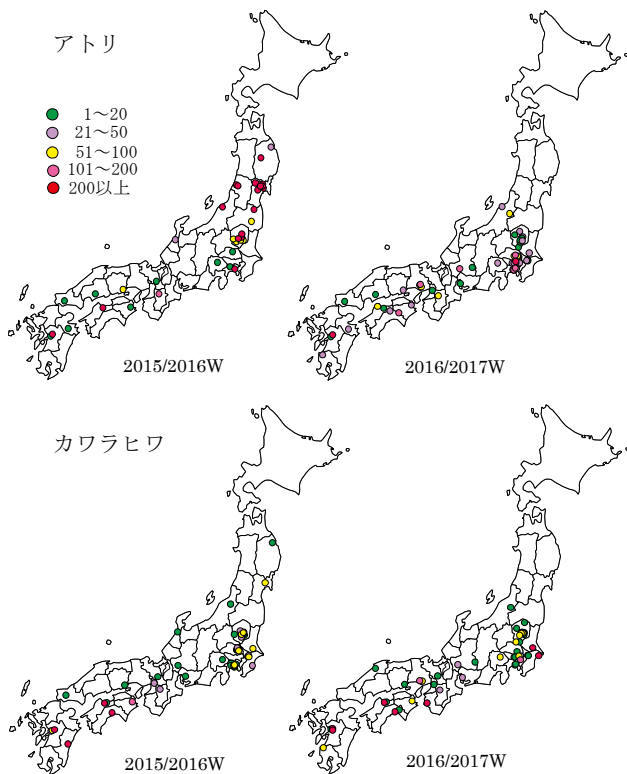


図 2. 2015 年冬と 2016 年冬のアトリとカワラヒワの個体数ランク別の記録地点の比較

カワラヒワ

バードリサーチが別に実施しているベランダバードウォッチの調査では、2016 年冬のカワラヒワの記録率が過去 8 年の調査で最低だったことが報告されています (http://www.bird-research.jp/1_katsudo/veranda/2016w.pdf)。そこで、冬鳥ウォッチのデータを基に 2016 年冬と 2015 年冬のカワラヒワの群れの大きさを比較してみると、関東地方や中部・近畿などは 2016 年冬の方が大きな群れランクが記録されているようにみえます(図 2)。しかし、両年とも調査が実施された 16 か所の調査地で実際の個体数を比較したところ、両年で有意な違いは得られませんでした(Wilcoxon の符号付順位和検定, $P=0.56$)。さらに、栃木県の比較的狭い範囲の 9 か所の調査地では、郊外の河川敷や農耕地の調査地は 2016 年冬のほうが 2015 年冬より個体数が多く、市街地や樹林地では逆に少ない傾向にありました。そのため、カワラヒワの個体数は、調査地の環境と密接な関係にあるのかもしれませんが、しかし、冬鳥ウォッチの調査地の環境は、複数の環境を選択するために全国的なレベルでの環境別の解析がで

きませんでした。したがって、冬鳥ウォッチでは、両冬のカワラヒワの記録個体数の違いについてははっきりしませんでした。

なお、昨冬は、過去 9 年間の結果をもとにカワラヒワの大まかな地域別の群れの大きさを報告しました。すなわち、カワラヒワでは 200 羽以上の大きな群れは西日本や四国、九州地方に多い傾向がありました。2016 年冬では近畿地方や四国・九州地方に加えて千葉県や茨城県でも 201 羽以上の群れが 2 か所で報告されました。関東の 2 か所は、広大な農耕地や草原などが広がった環境であることが示唆されています。このことから、温暖な地域に加えて広大な農耕地などが広がる環境もカワラヒワの選好する環境と考えられます。

情報件数が少なかったマヒワ

マヒワの情報件数は、6 種のうち 4 番目で、昨年の 26 件よりさらに減りました。参加者が増加してきた 2008 年以降の 9 年間では、2010 年や 2012 年のように 50 件前後と多くの情報が寄せられた冬もありましたが、2013 年冬以降は低いレベルで推移しています(図 3)。このうち 2010 年の状況は、2016 年冬のアトリのように市街地の公園などにも群れが飛来し長期にわたって観察された場所もあるほどでした。アトリもそうですが、身近な場所に日頃出現することが少なく、しかも羽衣が美しい鳥が見られると、情報件数が増加する傾向があるようです。

さて、2016 年冬は関東以外の地域からの情報があまり多くありませんでした(図 4)。ただし、関東では低山などの樹林地のほか東京などの緑地でも記録されました。

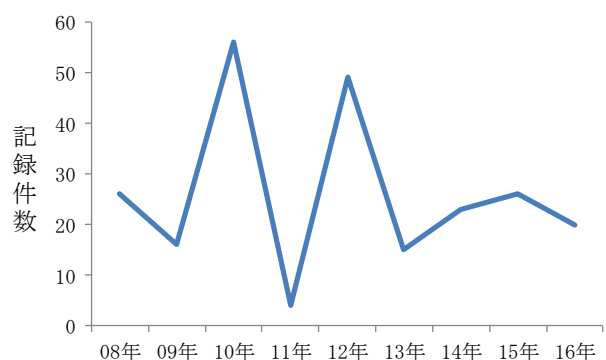


図 3. マヒワの 2008 年冬から 2016 年冬までの記録件数の推移

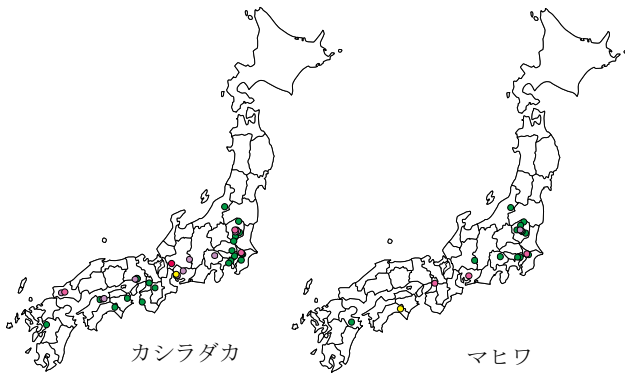


図4. 2016年冬のマヒワとカシラダカの個体数ランク別の記録地点
各調査地点のランクの色は図2と同じ

群れの大きさは、1~20羽の個体数の少ないランクが半数を占めました。100羽以上の群れも記録されました。今回、過去に大きな群れが記録された北陸地方や東北地方からの情報が少ないため、渡来数自体が少なかったかどうか判断できませんでした。しかし、秋口や初冬期に関東地方の山地の森林へ出かけても20羽前後の群れが見られる程度で大きな群れは記録されず、さらに春先の平地への飛来数も少数でした。やはり今冬は全国的に少なかったのではないかと推測されます。北陸地方や東北地方の情報をお持ちの方は、次回の報告の貴重な資料となりますので情報をお送りいただければ幸いです。

記録件数が急増したカシラダカ

2016年にIUCNのレッドリストに絶滅危惧種(VU)に選定されたカシラダカですが、バードリサーチでは冬鳥ウォッチを通してモニタリングしてきました。しかし、2006年冬期から11年間で合計337件の情報が得られましたが、カワラヒワやアトリに比べると記録件数が少ないのが現状です。その理由として、カシラダカはカワラヒワなどと違い、市街地の公園などにはあまり生息しないことが考えられます。また、本種は冬には大きな声で鳴かず、褐色の羽衣をしていることで目立たず、観察者の注意を引かないためかもしれません。実際に調査者の方から、カシラダカはカウントし難いとのコメントをいただきました。今回、情報件数が過去最多となったのは、調査者の皆さんがレッドリスト選定を機に意識的に注意深く観察したためか

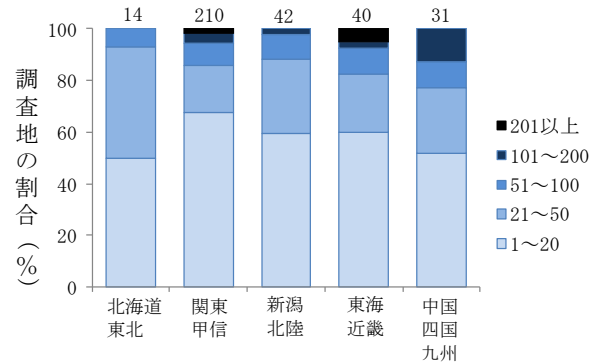


図5. カシラダカの11年間の地域別個体数ランクの比較

もしれません。一方で、岐阜県では500羽もの群れが記録され、過去最多の越冬期だったとの情報もありました(図4)。とすると、飛来数自体が多かった可能性もあります。

ところで、カシラダカは、関東などでは林縁の農耕地や疎林などに普通に生息する冬鳥です。しかし、11年間の冬鳥ウォッチの情報をみると、群れの大きさは、1~20羽(63.5%)やせいぜい21~50羽(21.7%)と言った比較的小さな群れが多くを占め、201羽以上の大きな群れはわずか1.8%に過ぎません。こうした傾向は、地域別に群れの大きさを比較しても同様でした(図5)。一方で、カシラダカは集団で就時し、良好なねぐら環境では400~500羽の群れも記録されます(平野未発表)。そのため、本種は、採食地では小群で行動する傾向があるのかもしれない。いずれにしても、同じ調査地で長年にわたって記録することで、本種の越冬地での個体数変動の資料になるのではないかと思います。



最後に

今冬のハイライトはやはりアトリの越冬状況とカシラダカの情報件数の増加でした。冬鳥ウォッチもこの調査を始めて 11 年になります。情報件数がなかなか増加しないのが悩みの種ですが、それでもここ数年はお蔭様でやや増加傾向にあります。報告書をまとめるにあたり過去の情報と見比べると、冬鳥たちの飛来状況が冬によってだいぶ変動することに改めて気づかされます。2015 年冬と 2016 年冬におけるアトリの変動は目を見張る思いです。2015 年冬ではかぞえることが不可能なほどの大群が北日本に出現したのに、2016 年冬ではせいぜい 21~50 羽以下の小さな群れが各地に出現するだけでした。2016 年冬に各地に生息していた数を合計すると 2015 年冬の飛来数とさほど変わらないのでしょうか。それとも 2015 年冬は、繁殖地での繁殖成績が良くて若鳥が多く、2016 年では繁殖成績が悪く若鳥が少なかったのでしょうか。興味は尽きません。関東に住んでいると身近な冬鳥のカシラダカですが、そのカシラダカがレッドリスト入りの情報に驚くとともに、改めてこの冬鳥ウォッチの重要性に気づかされました。

最後に、2016 年冬はイスカやハギマシコの情報がさらに減少してしまいました。どちらの種も他の 4 種に比べて生息環境が限られている種です。前者はマツ類など針葉樹林を選好し、後者は岩肌が露出した荒地や山地の

農耕地などです。そのため、あまり身近な環境では記録できない種です。それでも、イスカは 1960 年代や 70 年代では関東でも 100 羽を超える群れが記録されています。本調査では 2013 年冬にやや情報件数が増加し、せいぜい 1~20 羽の群れでしたが出現しました。これらの 2 種の繁殖地での生息状況の変化が気になります。イスカはまた大きな群れが記録されるのでしょうか。2017 年冬はマヒワが多く記録されるのでしょうか。今から楽しみです。今後とも参加者の皆さんには引き続きご協力いただきましたなら嬉しい限りです。末尾ながら今冬のご協力いただきました皆様のご芳名を記してお礼にかえさせていただきます。

安食一步, 飯泉仁, 五十嵐勉, 石塚文信, 井上賢三郎, 植田睦之, 上山義之, 大井智弘, 大塚啓子, 大塚之稔, 笠原武, 金子朗, 上出貴士, 上沖正欣, 川島賢治, 衣川直美, 木村有紀, 小池重人, 小嶋佐和子, 後藤拓弥, 小林俊子, 小堀脩男, 小松周一, 鹿間信弘, 柴田絵里, 嶋田哲郎, 清水敏弘, 白石ひとみ, 須田由美, 高橋邦年, 高橋佑亮, 多田英行, 田中正晴, 谷本洋子, 野中純, 濱伸二郎, 伴孝夫, 平野敏明, 藤波不二雄, 古川紀美子, 松村雅行, 両角英晴, 吉川明宏, 渡部通, 渡辺美郎の各氏(五十音順).

(平野敏明)